

縄文土器から始まった考古学研究の道 の伝承、南太平洋サンゴ礁の神話と創造へ



近森 正氏

慶応義塾大学名誉教授
考古学・民族学者

1935年東京生まれ。1965年慶応義塾大学大学院博士課程修了。慶応義塾大学文学部教授、オーストラリア国立大学太平洋研究所訪問教授、カンボジア王国派遣専門家、東京大学、千葉大学など講師、国立民族博物館共同研究員、帝京平成大学教授、大学評議員などつとめる。日本サンゴ礁学会副会長、現在名誉会員。公益財団法人国際教育財団理事。1964年以降ソロモン諸島、バブアニューギニア、フィジー、バヌアツ、クック諸島、フランス領ポリネシア、マーシャル諸島、ツバルなど40数年にわたってサンゴ礁の考古学、民族学的調査を続ける。主な著訳書に『サンゴ礁の民族考古学』、『サンゴ礁と人間』、『キキ自伝』、『サンゴ礁の景観史』（編著）など。

正反対の価値観を余儀なくされ多様な環境を生きた終戦後
何もなかった時代、
わら半紙の新聞のような仮とし教科書を手
貝塚掘りに汗を流し、
板チョコをハーモニカだと思っていた少年時代

調和の中の音楽空間が心穏やかな安住の地をつくる
ポリネシア音楽にある無音の価値、
刻むリズムは波のうねりと海鳥が舞う風景
限られた環境の中で資源を守り
生き抜いてゆく事をサンゴ礁の生き方に学ぶ



舘野 泉氏

ピアニスト

1936年東京生まれ。1960年東京藝術大学首席卒業。クラシック界のレジェンド。領域や分野に拘らず常に新鮮な視点で演奏芸術の可能性を広げ不動の地位を築く。2002年脳溢血で倒れ右半身不随となるも、しなやかにその運命を受けとめ、「左手のピアニスト」として活動を再開。尽きることのない情熱を一層音楽の探求に傾け、独自のジャンルを切り開く。“舘野泉の左手”のために捧げられた作品は10ヶ国の作曲家により、90曲にも及ぶ。傘寿記念公演では自らに捧げられた作品を含め4つのピアノ協奏曲を一気に演奏し、もはや「左手」のことわりなど必要ない、身体を超える境地に至った「真の巨匠」の風格は、揺るぎない信念とひたむきな姿もたらす、最大の魅力である。

HP <http://www.izumi-tateno.com>

考古学への興味の入り口は
縄文土器についていた指紋

学年になったわけです。

館野 よかったなあ(笑)

近森 当時1年の差ってものすごく大きかったですね。「どうすれば子科練に受かるか」算数の勉強を一生懸命やって、戦闘機に乗る、軍艦に乗る、兵学校に入る、それが勉強の励みでした。

近森 一緒に野球をやったり貝塚を掘りに行ったね。

館野 ある年の夏休み、歴史が専門の担任の先生と君と3人で佃島に調査に行って、その時ひとつ年上でしかも上海で育ったと聞いてビックリしました。上海時代、軍国主義の影響を受けて、帰国したら日本は戦後で今までとガラッと変わった教育になっていて、ずいぶん抵抗を感じた、と。僕は非常にポジティブな時代の空気の中で育ったので、戦後いろいろの違いについて考えることが多かったという話には驚きました。

近森 8月15日以来、変わったね。僕らは皆、軍国少年で「爆弾三勇士」にすごく憧れていましたから。それで日本に引き揚げてきて4年生をもつ1回やらされた。それで君と同じ

近森 今にして思うと、その3、4年の間の世代はちよつと特別だったのかな。

近森 そうだね。日本の教育史の中で僕らもちゃんと語って何か書き残さないといけないと思う。

館野 ひとつ上の世代の野坂昭如さんは「焼け跡派」と言っていましたね。

近森 国語の読み方で「テフテフ」が「チョウチヨ」になるように、正解が総て逆になった。僕らの世代は戦中と戦後の間で大きく振り回されたんだね。

館野 貝塚掘りの話だけど、小さい頃から「昔、何があったんだろう」という事にすごく興味があつてね。

近森 君は古い事に興味があつていたんだね。僕は全く興味があつた。だって、神武、綏靖、安寧、懿徳、



近森氏の著書：サンゴ礁と人間

近森 孝昭、孝安、孝霊……って、ずうつと明治までの歴代の天皇の名前を覚えさせられる。南北朝辺りで、わけがわからなくなつて、つかえるとピンタ、それが「歴史」でした。でも戦争が終わつたら、同じ先生が本当の歴史はそうじゃないと言って教科書に墨を塗って消した。引き揚げてきて、もう一度4年生をやつた時に配られたのは、質の悪いわら半紙のタブロイド判の新聞紙のような教

近森 教科書に「貝塚の話」があるんです。先生が近くの馬込貝塚に連れて行ってくれた時、そこで拾つた縄文後期の土器に指紋がついているのを見て、神様の時代なら神様の指紋だけど、人間の指紋だから「これは正しく人間が作ったものだ」と子どもなりに直感して、本当の事を知るにはこういうものを拾つて考えるしかない、と思つたんです。

館野 それがきっかけだったんで

教科書で、そこには戦争、天皇、神話に関するところが削除されて、最後にGHQが許可をした印の「approved by ministry of education」と記されています。その教科書が僕の所に1冊だけ偶然に残っていたんです。

館野 それは貴重ですね。

近森 その教科書に「貝塚の話」があるんです。先生が近くの馬込貝塚に連れて行ってくれた時、そこで拾つた縄文後期の土器に指紋がついているのを見て、神様の時代なら神様の指紋だけど、人間の指紋だから「これは正しく人間が作ったものだ」と子どもなりに直感して、本当の事を知るにはこういうものを拾つて考えるしかない、と思つたんです。

館野 それ

教科書で、そこには戦争、天皇、神話に関するところが削除されて、最後にGHQが許可をした印の「approved by ministry of education」と記されています。その教科書が僕の所に1冊だけ偶然に残っていたんです。

館野 それは貴重ですね。

近森 その教科書に「貝塚の話」があるんです。先生が近くの馬込貝塚に連れて行ってくれた時、そこで拾つた縄文後期の土器に指紋がついているのを見て、神様の時代なら神様の指紋だけど、人間の指紋だから「これは正しく人間が作ったものだ」と子どもなりに直感して、本当の事を知るにはこういうものを拾つて考えるしかない、と思つたんです。

館野 それ

教科書で、そこには戦争、天皇、神話に関するところが削除されて、最後にGHQが許可をした印の「approved by ministry of education」と記されています。その教科書が僕の所に1冊だけ偶然に残っていたんです。

館野 それは貴重ですね。

近森 その教科書に「貝塚の話」があるんです。先生が近くの馬込貝塚に連れて行ってくれた時、そこで拾つた縄文後期の土器に指紋がついているのを見て、神様の時代なら神様の指紋だけど、人間の指紋だから「これは正しく人間が作ったものだ」と子どもなりに直感して、本当の事を知るにはこういうものを拾つて考えるしかない、と思つたんです。

館野 それ

教科書で、そこには戦争、天皇、神話に関するところが削除されて、最後にGHQが許可をした印の「approved by ministry of education」と記されています。その教科書が僕の所に1冊だけ偶然に残っていたんです。

すか。

近森 ロマンとか歴史の興味は全くなくて、つまり嘘をつかれた事に対して本当の事が知りたかったんです。日吉は今立派な住宅街ですが、あの頃は畑や雑木林が沢山あって、縄文前期の「下組貝塚」で君と二人でガラガラ掘ったね。ちょうど6000年前の地球が温暖化した時期の貝塚です。今では瀬戸内海以南、沖繩の方に行かないと生息しない「ハイガイ」が出土して、地球の大きな環境の変動も感じさせてくれた。古い指紋の土器だけではなく、わくわくするような感動だったな。

館野 夏の暑い時に汗をたらしながら、少年時代にはそれも平気と言うかむしろ楽しんでましたね。

近森 中学1年生の時に、日本の歴史を書き換えるという国家的な事業で、静岡の登呂遺跡の発掘が大々的に始まって担任の先生に連れられて行きました。

館野 僕はピアノか何かあって行けなかったんだ……。

近森 その時一緒に行った、後にケルンの常任指揮者になった若杉弘君が登呂遺跡で口笛を吹いたので、

僕は「不謹慎だ」と怒ったんです。彼が指揮者になるなんて思わなかったからね(笑)

カレワラとサンゴ礁の 意外な共通点

館野 あなたは音楽には興味があったの？

近森 音符も読めないしピアノを見たこともなかった。君はどういういきさつでピアノを始めたの？

館野 父はチェロ、母はピアノの音楽家で、そういう時代でもいつも楽器があつて合奏もしていたし、常に音が鳴っている家で育ちました。アップライトのピアノを玩具みたいに弾いていたので音楽の道に進むのが当たり前だと思っていました。終戦の翌年小学校4年の時、食べ物も何もない時代に、子どもの為の若い人の為の「全日本学生コンクール」が催されてその時僕はドビュッシーの「子供の領分」を弾いたんです。

近森 それは疎開先での話？

館野 ここです。家にはドビュッシーやストラヴィンスキー、バル

トーク等の譜面があつて弾いていたので自然なことでした。

近森 羨ましいなあ。僕は戦後までピアノなんて見たことがなくて、楽器といったらハーモニカ。配給の硬い板チョコレットを見た時、ハーモニカだと思っていたんだよ。

館野 僕が最初に疎開したのは上野毛で、直撃弾が落ちて家は全焼、焼けたピアノがゴローンと転がっていたのを覚えています。その後約4か月、栃木県の田舎で靴も履かずに遊びまわっていたピアノなしの生活を何か月か送ったけど、それも素晴らしいかつたし、大事な時代だったと思います。

近森 多様な環境を僕は生きてきたんだね。

館野 しかし、全く別の道を歩む様になっても交流が続いたのは不思議ですね。

近森 お芋やすいとんを食べながら東大、明治、早稲田、慶応等日本の大学が結集して登呂遺跡の調査が始まり、見学する機会を得て慶応大学の先生お二人にお目にかかり、生涯の師弟関係になりました。あの出会いで方向づけられたような感じ

です。中学での君との出会いから高等学校を通じて、非常に濃密な時間だった。

館野 大学は推薦を辞退して藝大に行きました。当時、1学年に約1000人いましたが、推薦を辞退したのは18人だけでした。

近森 僕は考古学研究室に入る以外は考えていませんでしたが、音楽を聴くのは大好きで、ヨーロッパに飛び立つ君を羽田に見送りに行ったのを覚えているよ。

館野 一生の別れの様な感じだったね。

近森 「元気で行ってこい」って、飛行機が飛ぶまで「万歳、万歳」ってね。

館野 大学在学中も卒業してから「学校は学ぶ所だ」とは思ってたけど、あとは一人で武者修行に出ようと考えていたんです。ヨーロッパからその2年後にフィンランドに行きました。

近森 君が北欧に興味を持ったのは、中学1年の時から？「カレワラ」と言う伝承がある」ことや、それが「アイヌのコロボックルみたいなものだ」と神話の世界にフワッと引



考古学・民族学者：近森正氏

イメージを描くんですね。

館野 どういう経緯で南太平洋にシフトしたんですか？

近森 縄文だけじゃなく、カレワラの世界もコロポックルの世界もあるんだ、と君が世界を広げてくれたんですよ。サンゴ礁の考古学なんて誰もやっていない。サンゴの死骸が積み上がっただけの地形や限られた植物や土壌、飲み水だって乏しい。そんな貧しい環境にどうして人間が

住処を得たのだろうか、人類生存の限界を知ることができると。あなたも人がやらない所へ行く癖があるので僕らの共通点かもしれません。

館野 「環礁」って円くなるって不思議ですね。

近森 サンゴはさんご虫という口とお尻が一緒の腔腸動物で、石灰を作りながら生長するのですが、生息条件が厳しくて水温が摂氏18度を切ったり、摂氏30度を越えると死んでしまう。

館野 近年の地球温暖化による影響を最も受けやすいですね。

近森 実は東京湾の入口にも800年前にはサンゴ礁があった。でもその後、寒冷化が進んでサンゴ

礁はほとんど南に逃げて、今礁を作っているのは奄美や沖縄以南です。また地球が温暖化したら東京湾にサンゴ礁が出来るかもしれませんよ。温暖化の指標になるのです。

館野 カレワラと言うのはフィンランドの民族の叙事詩で、スウェーデン、ノルウェー、デンマークにあるサーガとは全くの別物で、英雄も出てこないし全部普通の人です。

近森 調査した二つの島の例です。見渡す限りの大海原に「タマゼイ」と言う神様がシロアジサシの姿で飛んでいると、海中からモクモクと黒い塊が持ち上がって、ひと廻りして戻って来るとその黒い塊は海上に出て島になって、それは「ワトウ」と言う女神でした。シロアジサシがワトウの岩に降り立ち交わると、辺りに白い波、赤い波が立ち、そこから「マタリキ」という神様が出てきて人間を産みます。人々の系譜を辿っていくと、マタリキの神様に行きつきます。そして、もうひとつ別の伝承。ハワイキに住む「ヒク」という男が、ある日漁に出ると何やら海の中に大きな岩を見つけた。それが島になった。驚いたことに、そこ

き込んでくれた。縄文からコロポックルやカレワラまで、僕の世界が広がった。これは、今でもドキドキする程の体験で日本の考古学よりも南太平洋に興味を持ったひとつの遠因でもあります。「カレワラ神話」に「ワ

イナミヨイネン」という、神様か人か判らない存在が風と水の精から生まれ、その膝元に鴨が飛んで来て卵を産み、その卵が割れて、欠片が陸地に、黄身が太陽に、白身が月になるんです。

館野 戦後、小学校3年か4年の頃家に「北海道国語教科書」があっ

て、そこにコロポックルの話が出ていたんです。

近森 神か人か判らない水の精が、この波間や水と空気の触れ合うところから生まれる。その「創造」のイメージが、サンゴ礁とよく似ています。サンゴ礁は、海中生物の珊瑚虫(さんごちゅう)と、褐虫藻(かちゅうそう)が共生して石灰を造りながらだんだん島になっていく。褐虫藻は10ミクロン程の小さな植物ですが光合成をしながら海面へ伸びていきます。僕は南太平洋のサンゴ礁に、まさにワイナミヨイネンのイ

にはマウイ神の三人兄弟がいた。聞けば、マウイ神の末っ子「マウイ・ポーチキ」が釣り針にかかった島を釣り上げたと言った。「いや、俺が最初に見つけた島だ」と言って喧嘩になつてしまふ。争い合ううちにマウイ神が地団駄を踏むと、岩が粉々に割れて小さな島が出来、マウイ神に打ち勝ったヒクは、そこにココヤシの実を3つ植えます。とある日、サワサワサワとココヤシの葉が揺れる音が聞こえてくる。ヒクからその一部始終を聞いた妹が夫と一緒に戻つてみると、ココヤシがたわわに実つていた。二人はそこで最初の人間になつたという話があります。

館野 「創始祖先」ですね。

近森 ココヤシと島、これが人間の社会をつくるんです。ポリネシアでもカレワラと同じ様な話に出会いました。

館野 素敵だなあ。サワサワと揺れているそんな音楽的なイメージですね。

近森 ヨーロッパ人と接触する迄ポリネシアにはウクレレやギター等の弦楽器はありません。ココヤシの幹をくり抜いてサメの皮を張った太

鼓や木を削り貫いた割れ目太鼓などの打楽器が中心です。そのリズムが物語をのせて歌い継いでいきます。**館野** カレワラもカンテレという楽器を使って歌い継ぎますが、ちゃんと物語になっていますよ。

サンゴ礁の文化に学ぶ

「分け合う」生き方

館野 研究対象はずっと太平洋で

近森 僕は長いことJICA、青年協力隊の委員をしていました。専門家としてカンボジアでも仕事を

し、熱帯モンスーン地帯の遺跡や文化の研究もしましたが、やっぱり太平洋の海の世界に強い関心があった、人類生存を考える事ができるサンゴ礁をやることになりました。サンゴ礁の島は標高がせいぜい3、4mしかなくそこまで掘ると海の水が湧いてきてしまう。島に降った雨はたちまち粗い砂の中にしみ込んで、その塩水の上に溜まり、地下に薄い水の層をつくる。その水のおかげで植物が育ち人間も命をつなぐ。カ

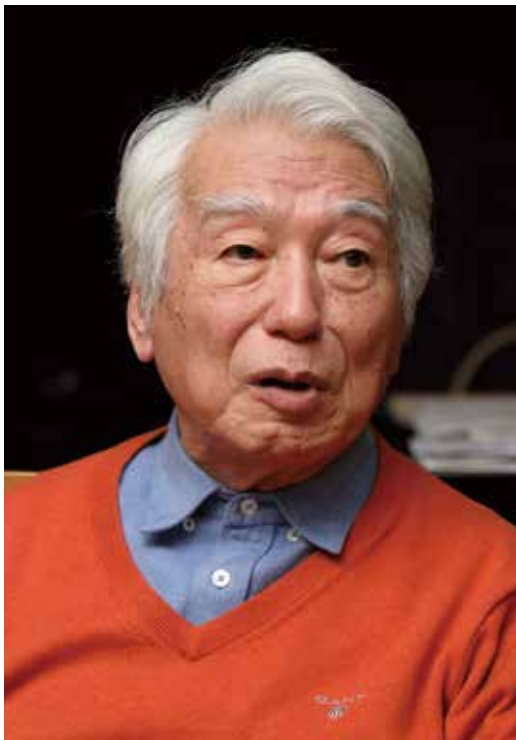
ヌーに乗ってやってきた人間はその水の層を掘り当てて、葉っぱを腐らせて黒土を作りタロイモの苗を植える。サンゴの欠片と有孔虫の死骸の堆積でしかない「死の世界」に人間の世界をつくり出すわけですよ。**館野** 穴を掘る道具はどうしていったんでしょうか？

近森 サンゴ礁の島には石がない。地面を掘る道具は真珠母貝の貝殻をシャベルにし、ココヤシの果肉を掻きだすには、真珠母貝の先を鋸状に削ったものを使っていました。斧はシャコガイの殻でつくる。それ

らは考古的な発掘によって出てきます。人間が住むサンゴ礁の島全体が遺跡なのです。

館野 言わば博物学ですね。

近森 そうです。考古学だけではなく、土壌や植物、貝や魚類などの知識が必要です。発掘していると、下の方には文化層のある遺跡が、ある所からは白砂で、一度人がいなくなつて、一定の期間を過ぎて再び人が住むようになったこと等も判ります。津波や大波、旱魃などに見舞われるような厳しい環境で生きていく為に何が一番大切かと言うと、食



左手のピアニスト：館野泉氏

物を作るだけでなく皆で分かち合う事、それがサンゴ礁に住む人々の社会組織の基本になっています。

館野 首長という人はいますか？

近森 首長は父系氏族のリーダーです。分配を受けるのに一番大事な

のはお墓です。子どもが生まれると名前をつける前にお墓を決める。お墓が決まれば父系出自集団が決まって、食物や財産を分けてもらえます。

また、食べ物だけではなく子どもも分け合います。共有地を大事にして、何時襲われるかもしれない災害に備え、力を合わせてココヤシやタロイモを栽培し漁をし、収穫物は皆で分け合う。サンゴ礁に住む人々の生き方と言えます。

館野 考古学だけでなく民俗学とか、総合的に研究してきたんですね。

近森 地球も限られた環境ですから、人間は限られた環境の中で資源を護って生きていかなければならない。サンゴ礁の生き方が教えてくれることは沢山あります。はじめて南太平洋のサンゴ礁に行ったのが、1964年、前の東京オリンピックの年でした。島の人々に教わったこ

とは限りありません。

衝撃を受けて自ら翻訳

首狩り族出身の「キキ自伝」

館野 あなたが音楽を聴いた時の

反応は他の人と全然違って、とても面白いね。「あれは水の精」とか現代音楽でも「あの中に、風が渡る様な感じがした」とかね。フィンランドとハワイには言語的にも共通点があって、フィンランドは単語の最後に「ラ」がつくと場所を指す。ポリネシアは最後に「イ」がつく単語が場所です。

近森 ハワイは島の言葉では「ハワイイ」、「ワイキキ」も最後は「ー」ですね。このハワイと言うのは「あの世」のことですよ。

館野 天国ですか？

近森 ポリネシアの人々にはそれぞれハワイキがあって、最初の祖先はそこから来ると、そして死者はそこへ帰る。つまり黄泉（よみ）です。

館野 最初と最後が同じというのは、輪廻を思わせませぬね。あなたはパプアニューギニアのキキさんの本を翻訳してるけど、どういうきっかけからですか？

けからですか？

近森 オーストラリア国立大学の

訪問教授をしている時にキャンベラで読んだのです。あまりに衝撃的だったので、帰ってきてすぐ翻訳したんです。この人はニューギニアのパングー党という政党をつくり、独立してから最初の副首相になるのですが、首狩り族が首相になると言う

ので、いろんな評論家が20世紀最大の奇書だ、とね。梅棹忠夫さんも日本には「福翁自伝」があるけど、南太平洋には「キキ自伝」がある、一生にして二代を生きた人と言っている、派遣される青年協力隊員の必読書にもなりました。首都、ポート

モレスビーにある大使館で講演をして、大平正芳首相も太平洋島嶼国会議の時に読んで下さった。太平洋島嶼国会議でキキが来日した時には大

学に案内したり、銀座の三越の靴屋で靴を眺めてプレゼントしたり、ポートモレスビーに行った時にはご自宅にも伺い、親しくさせていただきました。彼とは同世代ですが、お互い全く違った土地で同じ時間をどう生きたかを深く考えました。キキ自伝の冒頭に出てくる彼の幼少期の

原風景は、伯父が敵の部族に首を狩られ、棒に担がれて村に戻ってきた時、「白い土の上に真っ赤な血が流れ、その時、真っ赤な夕陽が山の端に落ちていった」と彼の執務室で聞いた時に、強く胸を打たれました。そういう世界に彼は生きていたんだ。考古学だけでは味わえない体験でした。

館野 縄文土器だけではそういう経験はしなかったでしょうね。

近森 もうひとつ印象的だったのは「太平洋共同体構想」を立てて太平洋で最初の独立国をつくってフィジーの初代首相になったカミセゼ・マラさんです。赤道をはさんで太平洋の1辺が9000kmに及ぶ広大な

三角形の地域に住む人々は、皆兄弟で、共通の基礎言語から派生した言葉を話し、文化を共有していた。それを分断したのは植民地支配なのだ。そのつながりを取り戻せば、太平洋の人々は強い絆で結ばれる。人類共存社会の様なものができるといえるのが彼の主張です。キャプテン・クックがニューギニアのマオリをレゾリューション号でハワイに連れて行ったら言葉が通じたと日記に



書いてあります。地球上こんな広い範囲に広がった民族はない、すごいでしょ？ 地球温暖化が進んで海面が上昇し、サンゴ礁の「環境難民」が問題になっていますが、それだけではありません。そこには日本も含めて、近代が犯した罪が大きく関わっていることにも目を向けなければというのが僕の主張です。

館野 産業革命以降ですね。

近森 社会は近代化によって変わっていききましたが、それに対してマオリ・キキさんやカミセセ・マラさんと同時代を生きた親近感、手を握りたくなるような繋がりを感じま

す。今、東南アジアや太平洋から来た学生に奨学金を出して教育を支援する「国際教育財団」の仕事をやっていますが、財団の支援を受けて日本で勉学を終え、世界のいろいろな分野で活躍する若者が同窓会を作ってアジア太平洋の連帯を呼びかけています。日本がアジアの中にもっとコミットしていく様な働きをしたいですね。

ヨーロッパの音楽

ポリネシアの音楽

近森 あなたは何故南フランスのラングドック地方のセヴラックに興味を持ったのか、訊きたいね。シベリウスの音楽は針葉樹の世界、セヴラックのラングドック地方は広葉樹の世界。シベリウスは非常に愛国主義的で透徹な澄み切ったイメージ、セヴラックはまるやかな地中海性気候をイメージするんだけど、フィンランドの針葉樹の世界とどうして一つになったのか…。

館野 それは不思議な事でも何でもないんですよ。藝大を落ちて浪人していた1年間は本当に素晴ら

しく、いろんなものに触れた時代でもとても大事な時期でした。その時に、アルフレッド・コルトーというピアニストが書いた「フランス近代ピアノ音楽」という全3巻を読みふけたわけですよ。その本の中にセヴラックと言う1項目があって、読んでみると他の作曲家とは全然違う世界で、分かり易く言えば、「土」や、農耕する生活も大事にしているんです。作名も、「刈り入れ」とか「収穫の時」とかね。何か月かかかって取り寄せた譜面が届き、レコードを聴こうと思ってもセヴラックの作品自体がレコーディングされているようなものじゃなかったし。

近森 マイナーな作家ですからね。

館野 取り寄せた楽譜を読んで、「いい音楽だな」と思ったんです。翌年、藝大に入って、安川加寿子さんに習った時、セヴラックの譜面を持って行ったら、「どうしてセヴラックなんて知ってるの？」と、本当に驚かれました。ピアノの作品では3つ大きな組曲がありますが、殆どそれだけで音楽史上では重要な作曲家でもない、という扱いでした。自分

では弾かないけれど心惹かれたんです。反逆児と言うのか反骨心と言うか、あまり有名なのは興味がないですよ(笑)

近森 それは僕も共通してる(笑) セヴラックの先生はヴァンサン・ダンディでしょ？ダンディの「フランスの山人の歌による交響曲(セヴェンヌ交響曲)」が大好きです。

館野 南フランスのセヴェンヌの民謡が元になっていて、あれは名曲だと思いますね。

近森 ベートーベン等がゴシック建築だとすると、セヴェンヌ交響曲はロマネスクを感じがするね。語りと音楽が一体になったトルバドゥール、吟遊詩人の世界の伝統がセヴラックやヴァンサン・ダンディに残っているとすればまた面白い話で、そこは音楽学者に任せないとね。

館野 僕も音楽学には全く興味がないんだよね。セヴラックは、他のフランスの作曲家と比べても作品に即興性が濃厚です。ピアノの曲でも書いて実際に自分で演奏してると、どんな姿を変えて今譜面になってるものが、果たして最終形ではない、これも又珍しい作曲家で、一方

シベリウスは物事を切り詰めて磨き上げて、最終的な形にするという違いがあります。ダンデイには「セヴェンヌ交響曲」の他に、若い頃の作品で「山の詩」というピアノの組曲があつて、その二つは素晴らしいと思います。歳を取っていくと教条主義

というか、理屈っぽくなって、作品が活き活きしてきませんね。

近森 残念だな。普通は若い時は理論的で、歳を取ると丸くなるんだけどねえ。

館野 ダンデイが「セヴェンヌ交響曲」や「山の詩」を書いた頃は、婚約者と出会って恋をしてたので活き活きとした音楽が溢れ出たと思いますよ。

近森 先程のポリネシアの音楽は打楽器だけでリズムがとても大事で、それにメロディーとして男の腹の底から出るような低音が何十人と重なると波のうねりのようになり、そこへ女達の甲高いソプラノが入ると波がぶつかって飛沫が上がる感じになります。リズムを刻む太鼓に併せてサンゴ礁の風景を描き出します。広い海原に海鳥が舞い上がる姿が目に見えそうです。

館野 大地をドーンと踏みしめる音とかね。

近森 踊りとか歌を分けることはできない。渾然一体となっていますね。

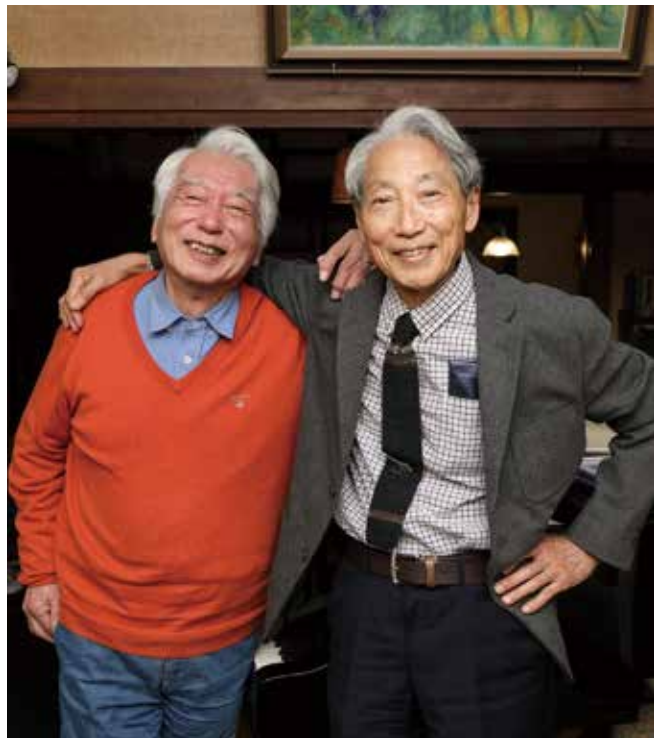
館野 トータリティーなんですね。

近森 調和しながらまさに海の世界、サンゴ礁の世界を歌い上げる。人間が生きているということは、音楽が創りだす空間に住み込むこと、住まいを作り、そこに守られ、心穏やかにしてられる所。それがすみかだと思えます。

館野 安住の地ですね。例えばそこへヨーロッパの音楽が入っても受け入れられて、又違う形でポリネシアのものとして続いている感じはありますね。

近森 そういう音楽空間を持つ人が安住の地を持っているというのは、太平洋の調査をしてみました。音楽のない人間、音楽のない民族はいないわけですね。

館野 でも、日本のクラシック音楽の世界は縛られているところがあつて違った領域に入れないんですよ。



対談を終えて

近森 全く反対の話ですが、ポリネシアの打楽器と男のうねり声と女の甲高い声がある時パツと止まり、一気に静寂が訪れ、星が瞬き、月の光が差し、遠くからヤシの葉擦れの音や波の音が聞こえてくる……、この無音の状態がどんなに大事か、それは彼らにとつて恍惚なんです

館野 僕がその無音の状態を西洋の音楽で聴いた唯一の経験は、シベリウスです。

近森 それはとてもいい話ですね。

館野 中学生の頃、シベリウス晩年の作品で、本当に一瞬音がなくなるんです。その印象がすごく強烈で、これはヨーロッパの人間には書けない、と思いました。

近森 ポリネシア人はちゃんとやってるんだね。

館野 すごいね。フィンランド人

の中でもシベリウスは特別で、晩年は自然の中に溶け込んでいったんだらうと想像します。

近森 君は左手で完全な曲を弾くでしょ。両手で弾いていた時より残響を大事にしているように思えるんです。

館野 僕はいつも大事にしてたけどね(笑)

近森 そうか、ごめん。残響っていうことだけど、僕はラスコーやペシユメールなどフランスの1万7000年ぐらい前の洞窟遺跡をずっと歩いてきました。洞窟壁画は有蹄類、つまり鹿や馬など蹄のある動物が描いてあって、そこで手を叩くと残響がしますが、広い岩のカンバスがあるのに、そこで叩いても音が響かない所がある。そこには音が打ってあるんです。面白いでしょ？

館野 ここで打つてもダメだよ、と言うことですか？

近森 旧石器時代の人が何を考えてそうしたのか判らないけど、そういう所には不思議なことに絵が描かれていない。

館野 音楽ホールも響きは大事で

す、最終的には音のない世界が一番と言う事ですね。

近森 ちょうどその論文を書いているところです。ポリネシアでチャントを歌い、太鼓を叩く、その歌が天に昇っていく音と、源郷へつながつていく音の交わる所に住処があるんじゃないか。ポリネシア人は、そういう所を探してカヌーを駆って海を渡って行った。広大な海域に同じ様な文化を築くことが出来たのは、そのような象徴景観をつくる努力の結果じゃないか、人間にとつて音楽が大事だと言う意味は、そういう事からも理解できると思います。

館野 すごくいい話ですね。

ポリネシア文化、巨石文化から近代に継がれているもの

近森 あまり知られていないけれどフランスの歴史家で評論家のヴィクトル・セガレンが軍医としてタヒチに行くんです。その時、タヒチにいたゴーギャンはもつと原始的な世界を求めてマルケサス諸島に行つて死んでしまうのですが、彼は総督の命を受けてゴーギャンの家を訪ね、

遺品を整理する。それによって、タヒチのゴーギャンが初めてヨーロッパに紹介されるんです。でね、セガレンはタヒチの音楽にすごく興味を持っていて、当時すごい売れっ子のドビュッシーにポリネシアの音楽を書きよように依頼するのだけれど実現しなかった。もう少し待っていただビュッシーがポリネシアの音楽を書いて、あなたが今頃、それを弾いていたかもしれないよね。歴史に「もしも」はないけれど。

館野 僕はドビュッシーをたくさん弾いたからね。

近森 そのドビュッシーの作品にドウアルヌネ湾にあつたという伝説の都市「イス」が海に沈んでしまう「沈める寺」というピアノ曲がありますが、海の底が黄泉の国で、ケルト神話にある話です。すごく風土性みたいなものを感じて、いわゆるケルトの音楽が近代音楽の中に脈々と生きているのがとても面白いと思います。民俗学の観点で言うと、フランスのブルターニュには「カルヴェール」と言う、大きな石の十字架が村の入口に建っていたりします。これは巨石文化です。ケルトの

時代や神話を経てカトリックに取り込まれて、未だに巨石文化がブルターニュに残っています。世界遺産になっている「カルナック」という有名な巨石文化の遺跡もあります。

館野 アイルランドの十字架もケルトを思わせませぬ。

近森 石造りの古い町ロクロナンでは6年に一度、巨石文化をキリスト教が継いでいる祭があります。泉を巡礼し巨石を巡礼し、火を焚く儀式です。また、ローヌ河口には地中海を流されて来た聖女マルトが、ローヌ河の水流に荒れ狂う怪獣に聖なる水と十字架を掲げて退治したというタラスクの退治の伝承と祝祭があります。ちょっとユーモラスな姿をしているけれど、このタラスクはキリスト教化されたローヌ河の水の精霊です。日本にも九頭竜川で龍が暴れるとか、利根川にも龍が出るとか同じような民俗があるけれど、僕は歴史を連続で見たい。

館野 そう、水の精霊と言うと、河童もいるしね。今日は盛りだくさんな話ができて楽しかった。そろそろ乾杯としようよ。

近森 そうだね(笑)